2012. 9. 1

一般社団法人 日本LD学会

会　報 第82号

Japan Academy of Learning Disabilities

［事務局］　〒108-0074 東京都港区高輪 3-24-18 高輪エンパイヤビル 8F
TEL:03-6721-6840　URL:http://www.jald.or.jp

主な記事

＜特集＞
・心理師国家資格について
・合理的配慮とは何か？
＜連続講座＞
・高等教育における発達障害学生の支援
＜お知らせ＞
・第 21 回大会について
・名誉会員の推戴について

特別支援教育の新たな課題

愛媛大学
花　熊　　曉

特別支援教育の体制づくりが始まって 10 年余りが経過し、学校園では、特別なニーズがある児童生徒の個に応じた配慮・支援に加えて、特別支援教育の考え方を取り入れた通常の学級の授業づくり（授業のユニバーサルデザイン化）、学級づくり（個の違いを認め合える集団づくり）の実践も広まってきました。そうした中、新たな課題となっているのが、幼・小・中・高の縦の連携の中で発達障害のある子の社会的自立・就労を目ざした支援をどのように行っていくかという問題です。残念なことに、学校園でのさまざまな取り組みにもかかわらず、不登校状態にある子どもは数多くいますし、学校教育期を何とか乗り越えたとしても社会生活がうまくいかず、「ニート」や「引きこもり」の状態に陥る人も後をたちません。

その原因を考えてみると、これまでの学校園における特別支援の取り組みが、「学校生活をどう問題なく過ごすか」に集中し、「将来の社会生活に必要な力を各年齢段階でどのように身につけるか」という視点が薄かったことが挙げられます。

学校教育終了後の社会生活を円滑に送るためには、障害の有無や程度に関わりなく社会生活に必要なスキルや態度が身についていることと、自尊感情・自己肯定感がしっかり育っていることが不可欠です。その達成にはさまざまな取り組みが必要ですが、筆者は、日常生活において、①「自分のことは自分でする態度」を育てること、②「したくなくても、しなければいけないことは、やらなければいけない」ということの理解を図ること、③「他者のために何かをして、他者から感謝されたり、ねぎらわれたりする経験」を幼児期からたくさん積み重ねること、の３つが重要だと考えています。特に③は、自尊感情･自己肯定感が育ち、子どもが自分の「存在価値」を実感していく上で極めて大切だと思います。子どもに発達のつまずきがあると、教師も保護者も「この子のために何ができるか、何をしてあげられるか」という点に目がいきがちですが、それだけでなく、「この子は、周囲の人たちのために何ができるか」という視点も見落とさないようにしたいものです。